



TITLE:

掠奪・農耕・交易から観た遊牧國家の發展: 突厥の場合

AUTHOR(S):

林, 俊雄

CITATION:

林, 俊雄. 掠奪・農耕・交易から観た遊牧國家の發展: 突厥の場合. 東洋史研究 1985, 44(1): 110-136

ISSUE DATE:

1985-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/154102>

RIGHT:

掠奪・農耕・交易から觀た遊牧國家の發展

——突厥の場合——

林 俊 雄

- 一 はじめに
- 二 第一可汗國時代
- 三 唐への内附と第二可汗國時代前期
 - (一) 河南居住時代の突厥降戸
 - (二) 北徙（六三九年）以後の突厥降戸
 - (三) 默曷の意圖
- 四 第二可汗國時代後期
- 五 おわりに

一 はじめに

遊牧國家が經濟的に發展するためには、遊牧以外の生産活動、すなわち掠奪・農耕・交易などを行なう必要があるといふことは、多くの先學によつて指摘されてきている。このうち、農耕と交易とが活潑に行なわれるようになると、集落とかが交易據點の發生という、定着化の現象が生ずる。従つて、遊牧國家・社會の歴史的發展をあとづけるさいには、經濟要因としての農耕と交易の發展、およびそれに伴う定着化の進行狀況とを檢討しなければならない。

私は先に、匈奴と鮮卑・柔然の場合をとりあげて考察し、結論として、匈奴においては、掠奪されたりあるいは自ら没入した漢人（ないし西域人）が集落に定住させられて農耕や手工業の生産に従事させられており、この傾向が鮮卑・柔然においてもつづいていたことを指摘した（林、一九八三—a、b）。また匈奴におけるそれらの集落の多くはモンゴル高原北部に位置し、そこには北方の丁零などの侵寇に備えて匈奴人兵士が駐屯していたが、まったく同様な例が柔然にも見られることにも言及した。

一方、上記の研究を通して、掠奪・農耕・交易がそれぞれ密接に関連しあっていることも明らかとなった。

本稿では、鮮卑・柔然につづき、突厥の経済的發展において掠奪・農耕・交易が果たした役割について、考察を加えてみたい。

二 第一可汗國時代

突厥は、普通第一可汗國（五五二—六三〇年）と、復興後の第二可汗國（六八二—七四四年）とにわけられる。第一可汗國時代の突厥については、農耕に関する文獻史料はまったく見られない。しかし匈奴などの場合と同様に、捕われてあるいは逃亡して突厥の地にはいった中國人は多数いた。これらの中國人が農耕に従事した形跡は見られないであろうか。以下に、それらの中國人の状況を見てみよう。

第一可汗國もその初期においては、四可汗が群立するというほどに内部は必ずしも強固な状態ではなかったが、隋末唐初の混亂期にあたる始畢・處羅・頡利の三代の頃には可汗の地位も尊嚴を増し、一定の國家的まとまりを保つようになっていた。そして第一可汗國でも特にこの隋末に、多数の中國人が突厥の地にはいった。

〔史料一〕隋末亂離のとき、中國人のこれ（突厥）に歸する者無數、遂に大いに強盛となり、勢は中夏をしのぐ（『隋書』卷八四「突厥傳」）。

〔史料二〕隋大業の亂のとき、始畢可汗咄咄吉嗣ぎて立ち、華人多く往きてこれに依る（『新唐書』卷二五上「突厥傳」）。これらは、亂を避けるためにあるいは突厥の勢力を恃んで自發的に突厥領内にはいったものであるが、そのほかに、突厥によって強制的に連れ去られた者もまた多かった。かつて護雅夫氏が指摘し、また拙稿でも觸れたように、匈奴においても鮮卑・柔然においても、史料に徴する限り、彼らの掠奪の對象は人間と家畜とがすべてであった（護、一九五〇、七頁。林、一九八三—a、五頁。林、一九八三—b、三七八、三八一頁）。このことは、突厥にもそっくりそのままあてはまる。入寇の回数・頻度は時期により異なるが、その掠奪の對象は、また常に人間と家畜であつた。⁽¹⁾⁽²⁾

〔史料三〕時（武德五年、西曆六三二年）に、頡利、并州を攻圍し、またその兵を分けて汾・潞等州に入り、その男女五千餘を掠める（『通典』卷一九七「突厥 上」）。

〔史料四〕初め、隋末に國馬みな盜賊および戎狄の掠めるところとなり、唐初はわずかに赤岸澤に牝牡三千匹を得るのみ。これを隴右に従し、太僕張萬歲に命じてこれを掌らしむ（『資治通鑑』卷二二、開元十三年十一月の條）。

さらに、戰鬪のさいに捕虜となつて突厥に連行された者も多數いた。

〔史料五〕（武德）八年（六二五）七月、頡利十餘萬騎を領し、大いに朔州を掠める。また將（軍）張瑾を太原に襲い、瑾全軍没するも、身を脱して李靖に奔る（『通典』卷一九七「突厥 上」）。

それでは、これら突厥の支配下にあつた中國人の數はどれほどであつたろうか。頡利可汗は貞觀四年（六三〇）初に唐に降伏するが、その前年までに中國に歸ることのできた者、および突厥など四夷の内附した者は、戸部の奏言によれば「男女二百二十餘萬口」にものぼるといふ（『舊唐書』卷二「太宗本紀」）。もちろん、この數字ははたして信用できるものかどうか裏附けがなく、また信用するとしても中國人以外に突厥などをも含んでいるので、中國人だけの數字はわからない。その後貞觀五年（六三一）には、隋末に突厥に没入した者を金帛でもってあがなっているが、その數は男女八萬人と報告されている（『舊唐書』卷三「太宗本紀」。および『資治通鑑』卷一九三 貞觀五年五月の條）。だがこのような唐朝の努力にも

かかわらず、貞觀二十一年（六四七）になつてもまだ相當數の未歸還者がいたのである。

〔史料六〕貞觀二十一年（六四七）六月、詔して曰く、「隋末喪亂のとき、邊境多く抄掠を被る。今、鐵勒並びに朝に歸して化し、しかして聞くななく、中國の人にして先に陥りて蕃内に在る者、涕なみだを流して南のかたを望み、踵をあげて歸らんことを思う、と。朕、これを聞き惕然として、深くもつて惻隱す。宜く遣して燕然等の州に往かしめ、現在の没落人數を知らしめ、都督と相い計り、物をもつて往きて贖あがなわしめ、遠きは程糧を給い、桑梓に送還せよ……」〔冊府元龜〕卷四二。

一方、突厥に亡命した者の中には、頡利可汗が唐に降伏したあと、中國にはもどらずに高昌に奔つた者もいた（史料七）。ちょうど同じ頃、貞觀三年（六二九）八月に長安を發ち、⁽³⁾翌春天山を越えてタラス河谷に至つた玄奘は、そこに中國人の集落を見出した。彼らはかつて突厥にさらわれ、その後集まつて住むようになったという（史料八）。

〔史料七〕初め、大業の亂のとき、中國の人多く突厥に投ず。頡利敗るるに及び、或いは高昌に奔る者あり。〔魏〕文泰みな拘留して遣らず。太宗詔して括り送らしめんとするも、文泰なおこれを隱蔽す〔舊唐書〕卷一九八「西戎傳」高昌の條。

〔史料八〕千泉より西行すること百四五十里にして咀邏タラ私城に至る。……南行すること十餘里にして小孤城あり、三百餘戸なり。もと中國の人なり。昔、突厥の掠めるところとなり、後遂に同國〔の人〕を鳩集し、共にこの城を保つ。中において宅居・衣服・去就は遂に突厥と同じなるも、言辭・儀範はなお本國〔の風〕を存す〔大唐西域記〕卷二。

このように未歸還者も多數いたのであるから、かりに上記の貞觀五年にあがなわれた「八萬人」に誇張があるとしても、やはり萬をもつて數えうるほどの中國人がいたことは確かであろう。

それでは、これら多數の中國人は、突厥領内でどのような生活をおくつていたのであろうか。隋の滅亡後、隋の蕭后と

楊帝の孫にあたる楊政道とが突厥に送られたが、これを迎えた處羅可汗は政道を立てて隋主（または隋王）となし、「隋末中國人の虜庭にある者は、悉く政道に隸せしめ、隋の正朔を行ない、百官を置き、定襄城に居らしめ、徒一萬を有」したことが知られている（『舊唐書』卷一九四上「突厥傳」）。

このように、楊政道のもとに集められた中國人は、突厥領内にありながらまったく中國的な生活をおくっていたのである。⁽⁶⁾そして定襄城附近は、後述するように（第三章第二節参照）、十分に農耕可能な肥沃な土地なのである。とすれば、彼らの生業も、彼らが故郷に居た時と同様に、農耕であつたと考えて大過なからう（もちろん隋の遺臣である官吏や都市手工業者などもいたことであろう）。

中國人のほかに突厥内において定住生活をおくっていた者としては、ソグド人がいる。護雅夫氏が説いているように、彼らが「東突厥國家の内部に……コロニイを形成して生活し」ていたことは確實であり（護、一九六七—a、七〇頁）、また羽田明氏が指摘しているように、「これらのソグド人は大なり小なり城市をつくつたのではなかったかと想像される」のである（羽田、一九七一、四三二頁）。

隋末の大業十年（六一四）頃に、隋の重臣裴矩が突厥の勢力を殺ぐ方策の一つとして、始畢可汗の知恵袋たるソグド人の首領史蜀胡悉を謀殺する詭計を立案した。それは、交易をえさにして彼を誘き寄せ、殺そうとするものであつた。奸計にのせられた史蜀胡悉は、「その部落を率い、盡く六畜を驅つて」、交易地點に馳せ附けたという（『隋書』卷六七「裴矩傳」）。この引用箇所は、既に馬長壽氏が注意を喚起しているように、ソグド人が部落を形成し、財産を所有する集團であつたことを物語っている（馬、一九五七、四一頁⁽⁷⁾）。ただしソグド人の場合は農耕に従事していたかどうかは不明であり、かりに従事していたとしても、可汗國の經濟に寄與するところはほとんどなかったであらう。

ところで、本章の冒頭でも述べたように、第一可汗國內において農耕が行なわれていたことを示す直接的な證據はないが、隋末唐初に突厥と結託していた群雄の領域内の農耕生産物を突厥が利用していたことを示す史料がある。

〔史料九〕（武德六年）（六二三）六月、戊午、高滿政、馬邑をもつて來降す。これよりさき、前の并州總管劉世讓、廣州總管に除せられ、まさに官に之かんとするに、上、備邊の策をもつて問う。世讓對えて曰く、「突厥このごろし
ばしば寇を爲すは、まことに馬邑これが中頓を爲すを以つての故なり。中頓は、中道に城有りて糧有り、もつて頓し食す
可きを謂うなり。食を置くの所を頓と曰う。唐人多く言う、頓を置く、と。請う、勇將をもつて崞城を成らしめ、多く金帛を
貯え、募りて降る者有らばこれを厚く賞し、しばしば騎兵を出してその城下を掠め、その禾稼を蹂みにじり、その生
業を敗^{さい}なわば、歳餘を出でずして、彼れ食するところ無く、必ずや降らん」。上、その計を然りとし、曰く、「公にあ
らざれば、誰か勇將たらん」。即ち世讓に命じて崞城を成らしむるや、馬邑これを病む。この時、馬邑の人多く突厥
に屬するを願わず。上、復た人を遣わして苑君璋を招諭せしむ。高滿政、苑君璋に盡く突厥の戍兵を殺し唐に降らん
ことを説くも、君璋從わず。滿政、衆心の欲するところに因り、夜、君璋を襲うも、君璋これを覺り、突厥に亡奔
す。滿政、君璋の子及び突厥の戍兵二百人を殺して降る（『資治通鑑』卷一九〇）。

突厥の戍兵を二百人も殺したというのであるから、いかに衆心得ていたとしても、高滿政麾下の兵士も相當數いたこと
と思われる。しかし突厥人守備兵のもとに突厥のために中國人が農耕生産を行なうという圖式は、かつて筆者が考察した
匈奴におけるイヴォルガ・ゴロディシチェの場合（林、一九八三a、二四―二五頁）と同じであり、きわめて興味深い（た
だし、馬邑は本來の突厥領よりは南の中國との境界線地帯にあるのに對し、イヴォルガ・ゴロディシチェは匈奴領の最北
端、ザバイカル地方に位置するという、地理上の差異はあるが）。

第一可汗國の末年には、しばしば飢饉が発生したことが伝えられている（史料一〇―一二）。これらの史料の中には「羊馬
皆死」とか「六畜多死」などと、家畜が斃死したことは述べられているが、穀物生産が凶作であったかどうかは觸れられ
ていない。しかし、以上述べてきたように突厥においても中國人による農耕生産があったであろうことを考慮すれば、不
順な天候は農耕にも惡影響を及ぼし、そのことも第一可汗國の衰亡に拍車をかけたことであろう。

〔史料一〇〕（武德）五年（六二二）春、胡大恩奏言す、「突厥飢荒す。馬邑圖るべし」〔通典〕卷一九七「突厥 上」。

〔史料一一〕貞觀元年（六二七）……その國（突厥）大雪（降り）、平地に數尺（積り）、羊馬みな死し、人大いに飢う
〔舊唐書〕卷一九四上「突厥傳」。

〔史料一二〕（貞觀）三年（六二九）……頻年大雪（降り）、六畜多く死し、國中大いに餓う。頡利、用度給らず、復た重ねて諸部より斂りたて、これに由り、下、命に堪えず、内外多くこれに叛す〔通典〕卷一九七「突厥 上」。

三 唐への内附と第二可汗國時代前期

貞觀四年（六三〇）に突厥第一可汗國が滅亡すると、漠北の霸權は薛延陀の手にうつり、突厥の餘衆はその支配下にはいるか、あるいは南下して唐に内附するに至った。その薛延陀も貞觀二十年（六四六）に、内訌とそれに乘じた唐軍の進攻により滅び、漠北も唐の羈縻支配を受けるところとなった。そしてしばらくの間唐の北邊は比較的平穩な時期を過したが、六七〇年代末から突厥獨立の氣運が高まり、たび重なる失敗にもめげず、ついに永淳元年（六八二）、阿史那氏一門の骨咄祿（在位六八二～六九二）が唐の支配から脱することに成功し、陰山山脈のあたりを根據地としつつ、徐々に版圖を擴げていった。そして骨咄祿とそのあとを襲いだ默啜（在位六九一～七一六）も、しきりに入寇掠奪を行なうようになる（史料一三～一五）。

〔史料一三〕文明元年（六八四）、又朔州を掠し、吏人を殺掠す〔通典〕卷一九八「突厥 中」。

〔史料一四〕長壽三年（六九四）、衆を率いて靈州を寇し、吏人を殺掠す〔通典〕卷一九八「突厥 中」。

〔史料一五〕聖曆元年（六九八）……軍いまだ發せずして、默啜盡く趙・定等州の男女八九萬人を抄掠し、五回道（五回は河北省易縣の西）に従いて去る。過ぎるところの殘殺は、あげて紀すべからず〔舊唐書〕卷一九四上「突厥傳」。

この第二可汗國時代前期で注目すべきことは、默啜が武后に對して、唐に降っていた突厥の部衆、いわゆる六州降戶

と、單于都護府の地との返還をせまり、あわせて種子と農器具とを要求してこれを獲得し、その結果突厥が強くなったとする史書の記述である。

〔史料一六〕 聖曆元年⁽¹⁰⁾（六九八）、默啜、表して則天と子とならんことを請い、あわせて女有るを言い、和親を請う。

初め、咸亨（六七〇—六七三）中、突厥諸部落の來たりて降附する者は、多くこれを豐・勝・靈・夏・朔・代等六州に處らしめ、これを降戸と謂う。默啜、ここに至りて又この降戸及び單于都護府の地を索め、兼ねて農器・種子を請う。則天、初めより許さず。默啜大いに怨み怒り、言辭甚だ慢り^{おこ}、我が使人司賓卿田歸道を拘え^{とら}、まさにこれを害さんとす。時に朝廷その兵勢を懼れ、納言姚璹・鸞臺侍郎楊再思、建議してその和親を許さんことを請う。遂に盡く六州降戸數千帳を驅り、あわせて種子四萬餘碩・農器三千事をもってこれに與う。默啜の浸強くなるはこれに由るなり（『舊唐書』卷一九四上「突厥傳」）。

これは、突厥における農耕に言及する唯一無二とも言える重要な史料であるが、それでは農耕に従事したのは誰であらうか、從來通り中國人であらうかそれとも突厥人であらうか。以下この問題についてくわしく検討を加えてみたい。

（一）河南居住時代の突厥降戸

まず問題とすべきは、「降戸」の性格である。というのは、唐に降っていた間に彼らが農耕を習得していたとも考えられるからである。ところが咸亨年間には、突厥が降ったことを示す史料がまったく見られない。六つもの州に分處させられるほど多くの突厥が降附したのは、第一可汗國が滅亡した貞觀四年（六三〇）前後の時だけであり、ほかに薛延陀が滅んだ貞觀二十年（六四六）から翌年にかけて鐵勒諸部多數が降附した例が知られているにすぎない。先にも觸れたように、咸亨頃までは唐の北邊も漠北も最も安定していた時期であり、このような大量降附を惹き起すような事件は發生していない。従って「咸亨中」の字句は誤って挿入されたのではないかとも思われる。いづれにしても、咸亨年間に突厥が降った

ことを示す史料が見あたらないのであるから、彼らの唐における去就も究明することはできない。しかし貞觀四年前後に降った者については、その去就をほぼあとづけることができるので、以下にややくわしく紹介してみよう。⁽¹¹⁾

突厥降戸をどのように處遇するかという問題については、唐の朝廷内に三つの意見があった。一つは、彼らを河南（黄河の南）に置いて完全に中國人化してしまおうとする意見、もう一つは、内地の邊境に置いて防備にあたらせ、禮法を教えれば、數年後には農民となるであろうとする溫彦博の意見、最後は、内地に置くのは危険であるから故地にかえらせようとする魏徵の意見である。結局、溫彦博の策が採用され、幽州から靈州までの間に彼らを居住させ、おもだった者は長安に住まわせることになった（『通典』卷一九七「突厥 上」）。

しかしそれから十年近くたった貞觀十三年（六三九）に、内附していた突利可汗の弟結社率が叛亂を起して太宗を暗殺しようとする事件が突發した。幸いにして暗殺は未遂に終ったが、太宗も突厥を河南に置くことに不安を感じ、彼らをすべて黄河以北に移すことに決め、突厥の總帥李（阿史那）思摩に對して、部衆を率いて北徙するよう詔を發した（史料一七）。さて、この十年間に、はたして溫彦博の考えるように突厥が農民となったであろうか。その問いには、二つの異なった答が提出されるのである。

北徙を命じられた突厥であるが、彼らは、當時漠北で威勢を振っていた薛延陀に襲われることを恐れて、あえて黄河の北に移ろうとはしなかった。そこで太宗は薛延陀に對して璽書を送り、薛延陀は「磧北」に、突厥は「磧南」に分かれて、おたがいに攻め合わないようにと傳えた（史料一八）。ところが、突厥に對する詔と薛延陀に對する璽書とでは、河南に居た時の突厥の狀況に關する敘述が異なっているのである。

〔史料一七〕貞觀十三年七月、詔して曰く、「……ここに於いて内外の職を選び、珪組を分かちてもってこれを授け、肥饒の地を擇び、州縣を設けてもってこれを處らしめ、倉府を開いてもってその飢寒を恤う……、今歲、已に積り、年穀、屢に登り、衆種増えて多く、畜牧は蕃息し、繒絮乏しき無く、みなその毳裘を棄て、菽粟は餘り有り、孤免に

靡^かち資^あえる……」(『冊府元龜』卷九六四)。

〔史料一八〕太宗、司農卿郭嗣本を遣し、〔薛〕延陀に璽書を賜いて曰く、「……頡利を黜廢してより以後、恆に更に可汗を立てんと欲す。ここをもつて降ずるところの部落等はみな河南に置き、その放牧に任す。今、戸口羊馬日々^{ますます}に滋多きに向う……」(『通典』卷一九七「突厥 上」)。

このように、史料一七では穀物生産も増えて「菽粟(豆類と穀類)」にも餘裕が生じたとあって、突厥が農耕をも營なみはじめたように解される。ところが史料一八では穀物生産のことは一言も述べられておらず、羊馬が増えたことだけが記され、突厥が黄河の南でも従来通り遊牧生活を送っていたように解される。

いづれをとるべきか決め手はないが、突厥降戸の一部が農耕に従事した可能性は否定できない。というのは、突厥ではないが、鐵勒九姓の一つでやはり唐に内附した思結が、ちょうどこの頃農耕に従事していたことが明らかだからである(史料一九)。

〔史料一九〕貞觀の初め、〔張儉〕軍功をもつて朔州刺史に累遷す……儉又廣く屯田を營なみ、歲ごとに穀十萬斛を致し、邊糧ますます饒^{ゆたか}なり。霜早に遭うに及ぶや、百姓に相い贍^みけんことを勸め、遂に飢餓を免れ、州境獨り安んず。後、檢校勝州都督となり、母の憂をもつて職を去る。儉、前に朔州に在る(とき)、たまたま李靖突厥を平ぐるの後〔にあたり〕、思結部落の貧窮離散する有り。儉、招いて慰安し、これを集める。その來らざる者、或いは磧北に居る。既にして親屬分住し、私に相い往還するも、儉みな拘責せず、ただ綱紀を存し、羈縻するのみ。儉移任するに及び、州司その將に叛せんとするを謂い、にわかにしてもつて奏聞す。朝廷、兵を發して進んで討たんことを議するも、なお儉を起てて使となし、就いて動靜を觀さしむ。儉、單馬にて誠を推し、その部落に入りて諸首領を召し、腹^{また}心をもつて布^ふべるや、みな匍匐・啓類して至り、すなわち移りて代州に就く。すなわち檢校代州都督に令す。儉、遂にそれに營田を勸め、毎年豊かに熟す。その私の富實を蓄えるは驕侈を生じ易きを慮り、表して和糴を請い、もつて

貯備に充つ⁽¹²⁾。蕃人喜悅し、邊軍大いにその利を收む。營州都督に遷り、護東夷校尉を兼ね、『舊唐書』卷八三「張儉傳」。このように、張儉の指導よろしきを得て、思結は農耕に従事するようになった。この史料一九の冒頭の部分によれば、張儉はかつて朔州刺史であった時にも廣く糧田を營み、邊境の食糧増産に一役かったというから、北邊での農耕技術に通曉していたのであろう。思結が農耕を營むようになったのが何年のことか正確にはわからないが、貞觀十五年（六四一）十一月に薛延陀が南下してきた時、張儉は既に營州都督となっているから、⁽¹⁴⁾それより數年以前であることは確かである。このように、北徙以前に突厥降戸が農耕に従事した可能性もあることを指摘しておこう。

(二) 北徙（六三九年）以後の突厥降戸と單于都護府の地

さて、李思摩の統率のもとに黄河を北に渡った突厥は、隋代の定襄城、現在のフフホトとホリンゴルの間のあたりに本據を置いた（岩佐、一九三六、八四―八五頁）。そして第一可汗國を復興するまでの間、一時河南に移ったこともあるが、ほぼこの磧南の地に居住していた。

ところで、このフフホト附近は、第二章で觸れたように、かつて啓民可汗から頡利可汗に至る三十餘年の間、突厥可汗の牙帳の所在地でもあったところであるが、⁽¹⁵⁾土壌が肥沃で、突厥にとつては垂涎の的であったことが知られている。『新唐書』「突厥傳」の表現に従えば、「その土地は、南は大河、北は白道〔川〕で、廣範に牧畜ができ、龍荒〔匈奴すなわち北方の民〕〔の地〕ではもっとも豊かなところで、突厥人たちは争ってそれを利用しようとしていたところである」（山田、一九七二、一六四頁）。この陰山南麓一帯は、遊牧に最適の牧草地帯だったのである（吉田、一九八〇、五二―五八頁。石見、一九八二、八四頁）。

しかし、これと同じ出來事を記す『太平御覽』では、「畜牧廣衍（廣範に牧畜ができ）」の代わりに、「白道收田」とあり、白道川で農作物を收穫することができたことを傳えている（『太平御覽』卷九〇四）。

このフフホト周邊の地で實際に農耕が行なわれていたことは、かつて岩佐氏が指摘したように（岩佐、一九三六、一二四—一二六頁）、『太平寰宇記』に明記されている。

〔史料二〇〕雲中〔城〕は周廻六十里、北は陰山を去ること八十里、南は通〔秦の誤りか？〕漢の長城を去ること百里、すなわち白道川なり。南北は遠き處三百里、近き處百里、東西五百里。〔城〕に至る〔まで〕良沃、沙土にして黒く、功を省きて獲る〔ところ〕多し、毎〔年〕七月に至りてすなわち熟す（『太平寰宇記』卷四九「河東道」雲州の條）。やや時代をさかのぼると、北魏の孝文帝の太和十二年（四八八）に、六鎮や雲中（すなわち漠南とフフホト附近）などに「水田を修め、渠を通して溉灌せよ」との詔が發せられている（『魏書』卷七下「高祖本紀」）。

また時代を下ると、十六世紀中葉にトメットのアルタン・ハンが板升バイシンを築き、耕地を開いて中國人を農耕に従事させたのも、まさにこのフフホト附近であった（青木、一九七三、八一—八三頁）。

そして、薛延陀が滅亡したあとの貞觀二十三年（六四九）、この地に突厥を統べるため唐の雲中・定襄兩都督府が置かれる。龍朔三年（六六三）にはその上に雲中都護府が置かれ、ついで麟德元年（六六四）に單于都護府と改名されたのである（岩佐、一九三六、七九—一〇〇頁、小野川、一九四三、三七五—三七七頁）。

以上述べてきたように、默啜が要求した單于都護府の地とは、このように十分農耕可能な肥沃な土地であった。そして突厥降戸の中に農作業を経験した可能性がある者がいることを考慮すると、默啜の求めた「降戸・單于都護府の地・農器・種子」は、すべて一つながりの文脈として理解することができよう。⁽¹⁶⁾⁽¹⁷⁾

（三）默啜の意圖

ところで、磧南で農耕に適した土地は、フフホト周邊だけに限られない。その西方の、陰山と黄河にはさまれた細長い平地もまた沃野であった（岩佐、一九三六、九四頁）。ここは漢代の五原、當時の豐州である。永淳二年（六八三）に突厥が

豊州を包圍した時、朝廷では豊州を廢して人民を靈州・夏州に徙せようとする意見が強かったが、豊州司馬の唐休璟はそれを不可として反對意見を述べ、その中で豊州は「田疇良美にして、もつとも耕牧に宜し」としている（『舊唐書』卷九三「唐休璟傳」）。

貞觀二十年（六四六）に薛延陀が滅亡してその配下の鐵勒諸部が南下して唐に降附すると、翌年唐は彼らを豊州に移し、燕然都護府の統括のもとに置いた（岩佐、一九三六、九一一九四頁）。その時都護となつた李素立は、彼らを手なづけ、屯田を開置したという（『舊唐書』卷一八五上「良吏傳」）。

豊州都督府は「縣を領さず、ただ蕃戸を領するのみ」⁽¹⁸⁾（『舊唐書』卷三八「地理志」）とあるから、そこで「屯田」に従事したのはおそらく「蕃戸」、すなわち突厥ないし鐵勒の降戸であらう。

上記の農器・種子等要求のあつた翌年、默啜は、穀種が蒸してあつて發芽しなかつたことなどを口實として入寇するが、その入寇の目標として「河北」、すなわち黃河以北の地を占領しようとする意圖を告げている。

〔史料二一〕 聖曆元年（六九八）……八月……默啜、書を移り、朝廷を數めて曰く、「我れに蒸穀種を與う。これを種くも生ぜず。一なり。金銀器はみな行濫にして眞物にあらず。二なり。我れ使者に與うるところの緋紫はみなこれを奪う。三なり。綃帛はみな疏惡なり。四なり。我、可汗の女、まさに天子の兒に嫁すべきに、武氏は小姓にして門戸敵さず。みだりに冒して昏を爲さんとす。五なり。我、これがために兵を起し、河北を取らんと欲するのみ」（『資治通鑑』卷二〇六）。

「河北」と言えば、單に單于都護府の地ばかりでなく、上述の豊州なども含まれることになり、ここに默啜は磧南の農耕適地全域の占領を意圖していたことがうかがえる。この年の九月の入寇で、默啜は「萬餘人」とも「八九萬人」（史料一五）とも言われる、前後に例を見ない大量の人民を掠取しているが、これは、磧南で農耕に従事させる者として突厥降戸だけでは足りなかつたためとは考えられないであらうか。

しかし、この默啜の企圖も、わずか十年後にもろくも崩れ去ってしまった。景龍二年（七〇八）、默啜が西方經略に忙殺されている隙をついて、唐が河北に三つの受降城を建設してしまったからである（史料二二）。そして開元二年（七二四）には逆にここで唐兵が屯田することになるのである（史料二三）。

〔史料二二〕景龍二年……三月、丙子、朔方道大總管張仁亶、受降城を河の上に築く（『舊唐書』卷七一「中宗本紀」）。

時に、突厥默啜、衆を盡して西のかた突騎施の娑葛を撃つ。仁愿、虚に乗じて漠南の地を奪取し、河北に三受降城を築かんことを請う。首尾相い應じて、もってその南寇の路を絶たんとするなり（『舊唐書』卷九三「張仁愿傳」）。

〔史料二三〕開元二年……閏（二）月……大都護府を中受降城に徙し、兵を置きて屯田せしむ（『資治通鑑』卷二二一）。

四 第二可汗國時代後期

默啜の治世の末年には諸部の離叛があいつぎ、それらの征討のさなか七一六年に默啜は横死し、若干の混亂のあと、骨咄祿の子默矩（默棘連）が立ち毗伽可汗ビルケとなった。

毗伽可汗の治世は七三四年まで二十年近くにわたるが、その間の對唐政策には、從來とは異なった注目すべき點がみとめられる。それは、その治世中にわずか一回しか中國に入寇していないという點である（骨咄祿は十年の在位中、七年間にわたって入寇が記録されており、默啜の場合は二十五年間の在位中、その前半の十二年間ほどに入寇が集中している）。しかもその入寇も、みずから好んで行なったものではなく、唐が東方の奚と契丹、西方の拔悉密と連合して突厥の本營を攻略しようとしたのに對し、その機先を制して突厥がまず拔悉密を撃つて北庭に至り、そのついでに甘・涼州に回って契苾部落を掠したにすぎない（史料二四）。また涼州での唐軍との戦鬭も、突厥の知將噉欲谷トウヤクコは和戰兩様の構えであったのに對し、唐の守將が攻撃をしかけてきたので反撃したにすぎない（史料二五）。

〔史料二四〕開元八年（七二〇）……十一月……辛未、突厥、甘・涼等州を寇し、河西節度使楊敬述を敗り、契苾部

落を掠めて去る。これよりさき、朔方大總管王峻、西のかた拔悉密を發し、東のかた奚・契丹を發し、今秋をもつて期して毗伽の牙帳を稽落水のほとりに掩おそわんことを奏請す。毗伽これを聞き、大いに懼る。噉欲谷曰く、「畏るるに足らざるなり。拔悉密は北庭に在りて、奚・契丹とは相い去りて絶えて遠く、勢いは相い及ばず。朔方の兵、計るにまたここに來る能わず。もし必ず能く來らば、至るに垂んとするを俟ちて、牙帳を徙して北行すること三日なれば、唐兵は食盡き自ら去らん。かつ拔悉密は輕〔薄〕にして利を好む。王峻の約を得るや、必ずや喜んで先に至らん。峻、張嘉貞と相い悦ばず、奏請は多く相應せず、必ずや敢えて兵を出さざらん。峻の兵出でず、拔悉密獨り至らば、撃ちてこれを取り、勢い甚だ易きのみ」。既にして拔悉密果して兵を發して突厥の牙帳に逼るも、しかして朔方及び奚・契丹の兵至らず、拔悉密懼れ、引き退く。毗伽これを撃たんと欲するや、噉欲谷曰く、「この屬ともがら、家を去ること千里、まさに死戦せんとす、いまだ撃つべからざるなり。兵をもつてこれを躡おそうにしかず」。北庭を去ること二百里、噉欲谷、兵を分ちて閑道より先に北庭を圍み、因りて兵を縦にして拔悉密を撃ち、大いにこれを破る。拔悉密の衆潰走し、北庭に趨るも入るを得ず、盡く突厥の虜にするところとなる（『資治通鑑』卷二二）。

〔史料二五〕噉欲谷、兵を廻し、因りて赤亭を出でてもつて涼州の羊馬を掠す。時に楊敬述、涼州都督たり。副將の盧公利・判官の元澄を遣して兵を出してこれを邀撃せしめんとす。噉欲谷曰く、「敬述もし城を守りて自ら固めれば、すなわちともに連和せん。もし兵を出して相い當らば、すなわち須く決戦せん。我れ今勝に乘じ、必ずや功有らん」。公利等の兵、刪丹に至り、賊に遇う。元澄、兵士をして臂かを擡かげて滿を持せしめ、かさねて急いでその袖を結ばしむるや、たまたま風雪凜烈にして、盡く弓矢を墜す。これによりて官軍大敗し、元澄は身を脱して走る（『舊唐書』卷一九四上「突厥傳」）。

このように、中國に對する入寇は無きに等しいのに對し、朝貢は七二年以來毎年數回ずつ缺かさずに行なうようになる。そして開元十五年（七二七）には、吐蕃が共同で唐に入寇しようと書狀を送つて小殺（毗伽可汗）を誘つたのに對し、

かえてその書狀を玄宗に獻じて誠意を示し、毎年絹數十萬匹を馬と交易することを許されるに至る。

〔史料二六〕（開元）十五年、小殺、その大臣梅錄啜をして來朝せしめ、名馬三十匹を獻ず。時に、吐蕃、小殺に書を與え、まさに議して同時に入寇せんことを計らんとするも、小殺、并せてその書を獻ず。上、その誠を嘉し、梅錄啜を引きて紫宸殿において宴し、厚く賞賚を加え、かさねて朔方軍の西受降城を互市の所となすことを許し、毎年、練帛數十萬匹を齎し、邊に就きてもってこれを遺る〔舊唐書〕卷一九四上「突厥傳」。

しかし、このように突厥の對唐政策が變つたのは、毗伽可汗が親唐家であつたからではない。いな、むしろ彼は即位當時の開元四年（七一六）、河曲オルドスの突厥降戸が自分の方に歸順してきたのを機會に南下して入寇しようと企てたほどである（ただしこの時は、噉欲谷の諫言に従つて思いとどまつている）〔通典〕卷一九八「突厥 中」。

また毗伽可汗碑文の中では、唐人の甘言にのせられて破滅に陥らないようにという毗伽自身の警告が、突厥の一般民衆に對して繰り返し發せられている（毗伽可汗碑文北面四〇六行目。護、一九七六、七頁）。上記の史料二六に見られる吐蕃の書狀の獻上も、唐に對する忠誠心の發露というよりは、毎年多量の絹馬交易を行なう確約を得るための方便とみなすべきであらう。

かくして毗伽可汗は、突厥可汗國の經濟的發展を計る方策として、中國に對しては從來の掠奪第一主義を棄て、交易重視策をとるに至つたのである。この毗伽の交易重視策は毗伽可汗碑文の中にも、「ウチュケンの地に住みて、隊商送らば、如何なる汝の憂苦なし！」と表現されており（北面六行目）、護雅夫氏はそれを「經濟的ナシヨナリズム」の語でよんでいる（護、一九七六、六—九頁）。

この交易重視策は、毗伽可汗の死後にもひきつがれた。張九齡の『曲江集』には、開元二十二年から二十四年（七三四—七三六）にかけて突厥の兒可汗、すなわち玄宗と名目上父子關係にあつた登里可汗テングリ（護、一九六七—七〇、二〇八頁）に對する敕がいくつかおさめられているが、その中には、突厥のもたらす馬が多過ぎることをとがめる内容のものが見うけら

れる。

〔史料二七〕兒突厥可汗に敕す、「……蘇農賀勒・處刺達干等、去歲、馬を將らすに、その數倍多く、また諸蕃の馬の來る有り、またこれ兒の發遣するところなり。かつて先の可汗在りし日、毎年納むる馬は三四千匹を過ぎず、馬既に多くなければ、物また辨じ易し。この度納めるところは、前後一萬四千。兒初めて可汗に立ち、朕また結びて父子となるに緣り、恩義相及ぶ。却廻すべからず、總て留める所以なるも、物、五十萬匹を計う。兼ねてたまたま國家に大禮あり、並びに天下の租庸を放ち、用度窮りなきは、特り和市のみにあらず。これに緣りて馬價は、通容（調達の意か？）やや遅れ、處刺達干のいまだ還らざるは、これ故爲に留滯するにあらず。悉くこの意を念い、まさに復た寛心すべし。今、續續と市易されるを見るに、久しからずして了らんことを望む。すなわちまさに發遣せんとし、廻る日、除からず。ここに在りてもまた家に當るが如くして、去るも住むもまた何ぞ異ならんや。こののち、將らす馬の來りて納むるは、必らずや多くすべからず。また先の可汗の時の如く、約して定準を有し、來使・交易せば、發遣も易くなり、事すべからく久長にして、これ限隔するにあらず。……」（『唐丞相曲江張先生文集』卷十一 敕書、敕突厥可汗書）。この史料の冒頭に見られるように、突厥は、馬三四千頭の規制からまぬがれるために、突厥以外の「諸蕃」の名をかたつて馬をもたらししている。この敕より數箇月前に出された別の敕では、蘇農賀勒が堅昆の馬をも伴ってきたことが指摘されている（『唐丞相曲江張先生文集』卷十一 敕書、敕突厥可汗書）。このような姑息な手段を唐朝廷が見抜き、警告を發したわけである。

突厥について漠北に興ったウイグル可汗國（七四四―八四〇年）は、大々的に絹馬交易を展開し、その交易量の多さによって唐朝廷にしばしば音を上げさせたが、そのウイグルと比較してみよう。ウイグルの場合、文獻で確認される最大量は、貞元六年（七九〇）の絹三十萬疋、太和元年（八二七）の絹四十六萬疋（『冊府元龜』卷九九九）、元和三年（八〇八）の絹五十萬匹（白居易『長慶集』卷四〇）などである。ほかに、代宗（在位七六二―七七九年）の頃、ウイグルが年間に馬十萬頭を

送り、馬價として絹百餘萬匹を受取っていたとする史料もあるが、『新唐書』卷五一「食貨志」、これは個々の具體例で確認することはできない。このことから見ても、史料二七の馬價、絹五十萬匹という數字がいかに大きいか、つまり末期の突厥可汗國がいかに絹馬交易を活發に展開していたかがわかるであろう。⁽¹⁹⁾

このように定期的に大量に絹馬交易が行なわれるようになると、交易據點としての都市が発生しても不思議ではない。まさしく毗伽可汗は「城壁を修築し、佛寺・道觀を造立せんと欲」するまでに思い込むのであるが、草原地帯での遊牧的生活様式の優越を確信する噉欲谷の諫言によって、思いとどまった。

〔史料一八〕小殺、また城壁を修築し、寺觀を造立せんと欲するも、噉欲谷曰く、「不可なり。突厥は人戸寡少にして、唐家の百分の一に敵さざるも、常に能く抗拒する所以は、正に水草に隨逐し、居處常無く、射獵をもって業となし、また皆武を習い、強ければ則ち兵を進めて抄掠し、弱ければ則ち山林に竄伏し、唐兵多しといえども、施し用うる所無きをもつてなり。もし城を築きて居り、舊俗を改變せんか、一朝、利を失わば、必ずまさに唐のために併せられんとす。且つ、寺觀の法は人に仁弱を教え、もとより、武を用い強を争うの道にあらず。置くべからざるなり」。小殺等、深くその策を然りとす〔舊唐書〕卷一九四上「突厥傳」。

遊牧國家にとって、城郭を築いて定住することが、中國との軍事的關係という見地からは得策ではないとする考え方は、古く匈奴の時にも見られ（林、一九八三—a、二五頁）、連綿として遊牧國家の支配者層の中に生きつづけていたのである。⁽²⁰⁾ こうして、北アジア史上初の遊牧君長の主導による城郭建設の事業は、見果てぬ夢と終つたのである。

五 おわりに

本稿では、北アジアに興つた遊牧國家の歴史的發展を、掠奪・農耕・交易という經濟的側面から明らかにするために、突厥に焦點をあてて考察した。⁽²¹⁾ その結果、突厥も、從來の匈奴・鮮卑・柔然などの遊牧國家と同様に、中國に對して入寇

を繰り返し、人民と家畜を掠取した。そしてそれらの人民は、集落に定住させられ、主として農耕に従事させられていた。

残念ながら、今のところ突厥時代の集落址は発見されていないが、中國人やソグド人の集落があったことは十分想定しうる。ただしその位置は、匈奴や柔然のように北方ではなく、隋の亡命政權がフフホト附近に置かれたことに見られるように、南より中心があったように思われる。

この差異のよって來たる所以は、啓民可汗が隋に内附して磧南の地に移って以來突厥の本據地がこの附近に置かれ、また默啜の要求に見られるように、突厥がこの地方の豊かさを知悉していたことであろう。實際問題として、モンゴル高原北部よりはずっと南のこのあたりの方が、農耕しやすいであろう。しかしながらこの地は唐に近過ぎるという弱點をもっており、結局、唐はここに三受降城を築き、突厥をこの地からしめだしてしまった。

その後、默啜をついだ毗伽可汗は、この地方の領有と掠奪とをあきらめるかわりに、交易活動を重視する政策に方針を轉換した。ここに、のちのウイグル可汗國の支配層がとった交易重視策の萌芽を見ることができるといえる。

毗伽可汗の死後、第二可汗國は内訌の泥沼に陥り、破滅への坂道をころげ落ちていく。毗伽可汗の城郭建設の企圖が實現を見るには、次のウイグル可汗國の成立まで待たなければならない。ウイグル可汗國における都市と交易・農耕の發展、その對唐政策などの問題については、別稿に譲りたい。

註

(1) 史料の裏附けがないにもかかわらず、遊牧民の入寇掠奪の目的は農産物の獲得にあったとする見方が、根強く残っている (Jagchid, 1977, pp. 177-178; Kwanten, 1979, p. 41)。一方、馬長壽は史料に忠實に従い、突厥の入寇の目的を人民掠取

にあったとし、掠された中國人が突厥國內で奴隸とされていたと説くが (馬、一九五七、八七—九一頁)、彼らが具體的にどのような生業に従事していたかについては觸れていない。馬氏は、第一突厥にはまだ奴隸制が残っていたが、復興後の突厥は封建制社會にはいっていたとする (同上、八五—九八頁)。草

原社會の奴隸制・封建制の問題は、日本では最近あまりとりあげられることがないが、いづれ稿を改めて検討してみたい。

(2) 掠奪の對象として、同じ人間でも専ら女性だけをねらった場合もある。たとえば、唐の建國當初（武德三年、六二〇）、處羅可汗が李淵の同盟軍として并州に至った時には、援軍であることを笠に着て、城中で「美婦人」を多くかどわかしている（『通典』卷一九七「突厥上」）。

(3) 玄奘が長安を發った年次については貞觀元年説もあるが、ここでは貞觀三年説を採用しておく。

(4) 水谷眞成氏は、貞觀五年に金帛によってあがなわれて中國に歸ることのできた男女八萬人の中には、「この阻邏私近邊の中國人もこれに含まれていたであろう」と述べている（水谷、一九七一、二二頁）。しかし史料六に見られるように、貞觀二十一年になってもまだ「南望」する者、つまり中國内地に比較的近い漠北に居ながら歸ることのできない中國人が居たのであるから、亡命中國人を拘留している高昌（貞觀十四年に唐に滅ぼされる）よりもはるか西方の西突厥領内の中國人にまでこの時期に唐朝廷の救恤の手が及んだとは思えない。

一方、松田壽男氏は、同じく史料六から「游牧アルタイ・テュルクは、中國から農民を掠めてきて、彼らを集團としてオアシス作りをさせていた。しかもこんなに遠く西方に離れていたその西方基地（スイ・アブ）の近くにまで彼らを強制的に移住させて、農耕生産による基地の維持をはかっていたのである」と結論づけている（松田、一九六七、七—八頁）。突厥が掠取してきた中國人に農耕させていたとする見解には、一般論とし

ては賛同するが、この史料の場合に限って言えば、突厥が意圖的に中國人をタラス附近にまで移住させたと考えんことはできないであろう。というのは、東西突厥の分離（五八三年）以後、タラス附近は西突厥の領内にあり、東突厥がそこまで移住させることができたとは考えられないからである。また分離以前のこととしても、これほど遠くまで徙すのは不自然である。

頡利可汗の末年には東突厥國內は混亂狀態に陥っており、先述のように高昌に奔った者もいた。また註（6）の史料二九・三〇に見られるように、突厥の支配下を離れて集團を形成する者もいた。史料七に「昔、突厥の掠める所となり、後、遂に同國（の人）を鳩集す」とあるのは、以上のような事情を表現したものと理解すべきであろう。

(5) この隋朝亡命政權の成立については、石見清裕氏の專論がある（石見、一九八三）。なお、この定襄は、唐代の河東道忻州（現山西省忻縣）に屬する定襄ではなく、隋の定襄郡（現內蒙古自治區ホリンゴル附近）である。

(6) これらの中國人は、名目上は隋王の宗主權下にありながらも、間接的には突厥の可汗の支配下にはいつていたにちがいない。もっとも、頡利可汗の末年、突厥可汗國內が混亂狀態に陥り、游牧諸部族が離叛しはじめると、これらの中國人も突厥の支配下から離れ、おたがいによび集まって要害の地で暮らしていたようである（史料二九）。『貞觀政要』に見られる山賊の類も、このような連中であらう（史料三〇）。

〔史料二九〕後、李靖を遣わして突厥を経略せしむるに〔張〕公謹をもつて副となす。公謹、因りて突厥取るべきの狀を言

いて曰く、「……華人、北に入り、その類實に多し、このごろ聞くならく、自ら相い嘯聚し、山險に保據る。師、塞垣を出れば、自然、應ずる有らん。その取るべきの六なり」(『舊唐書』卷六八「張公謹傳」)。

(史料三〇) 貞觀九年(元年の誤りか)、北蕃の朝に歸する人、奏す、突厥内大雪(降り)、人飢え、羊馬並びに死し、中國人の彼「の地」に在る者は皆山に入りて賊を^なし、人情、大いに惡し、と(『貞觀政要』卷八辯興亡第三十四)。

(7) 護雅夫氏は、史蜀胡悉の姓が史であることから、彼が史國(キシユ)出身であり、彼の率いる部落とはキシユ人集團の謂であつたのではないかと推定している(護、一九六七—a、六六頁)。

(8) 倬城は、雁門關をはさんで馬邑城の南約五五キロメートル。

(9) 『舊唐書』卷六「武后本紀」と同じく卷八九「狄仁傑傳」、『資治通鑑』卷二〇六 唐紀二二 則天武后聖曆元年(六九八)では、「默廢(突厥)、掠める所の趙・定州男女萬餘人を盡く殺す」とあり、掠めた人數も少なく、しかもそれをみな殺してしまつたとしている。

(10) この出來事は、『通典』卷一九八「突厥 中」、「舊唐書」卷一八五上「田歸道傳」、「唐會要」卷九四など、みな聖曆元年(六九八)のこととしているが、しかし早くも胡三省が指摘し「通鑑考異」卷一一、また岩佐精一郎・岑仲勉兩氏もくわしく考證しているように(岩佐、一九三六、一一五・一五六—一五七頁。岑、一九五八、三三四—三三五頁)、降戸その他を請

うたのは萬歲通天元年(六九六)のことであり、それらが突厥にもたらされて田歸道が唐に歸つてきたのは神功元年(六九七)のことである。

(11) 第一可汗國滅亡から第二可汗國復興までの突厥の動靜については、岩佐精一郎氏が詳細に論じており、本稿も氏の論考に多くを負っている(岩佐、一九三六、七七—一六七頁)。

(12) 原文では「擬して充つ」とあるが、『資治通鑑』卷一九三に「以て充つ」とあるのを採用する。

(13) 『資治通鑑』はこの一連の出來事をまとめて貞觀四年九月の條に載せているが、この日付は、思結部が降附してきた時のものであろう。

(14) 「(貞觀十五年)十一月……癸酉、薛延陀、同羅・僕骨・迴紇・靺鞨・靺衆をもつて漠を度り、白道川に屯す。營州都督張儉に命じて、部する所の兵を統べてその東境を壓せしむ」(『舊唐書』卷三「太宗本紀」)。

(15) この地域を根據地として勢力を貯えた遊牧國家は、突厥がはじめてではない。北魏の始祖拓跋力微が三世紀中頃に本據を定めた盛樂も、このあたりにあつた。

(16) 單于都護府の地・種子・農器の要求が關連をもつことは、つとに岩佐氏が指摘している(岩佐、一九三六、一一五頁)。

(17) ソ聯の研究者ベルンシュタムは、默廢の支配の頃に突厥社會において階層分化が進行して貧困游牧民が定着農耕民と化し、彼らのために農具を默廢が要求したものと解釋している(Бернштам, 1946, cc. 181—182)。ソ聯の學界には、游牧民の定着化はその零落して貧窮化した層からはじまるとする通説が

あることを私はかつて指摘したことがあるが（林、一九八三—
a、二三頁）、この場合も、その通説をただあてはめただけの
もので、降戸との関連などについてはまったく觸れられておら
ず、従い難い。

(18) その後、永徽元年（六五〇）に永豐縣、永徽四年（六五
三）に九原縣が置かれる（『舊唐書』卷三八「地理志」）。

(19) 「絹五十萬匹」という數字をそのまま信用してもよいのか
という疑問も生ずると思うが、馬が一萬四千頭であるから、馬
一頭につき絹約三十六匹となり、のちのウイグル時代初期の交
換比率（馬一頭につき四十匹）に近い（史料三一）。

（史料三一）大曆八年（七七三）五月、……回紇、乾元（七
五八—七五九）より以來、歲ごとに和市を求む。一馬毎に四
十縑を易え、ややもすれば數萬匹に至る（『資治通鑑』卷二
四唐紀四の代宗大曆八年（七七三））。

後述する（附記）の史料三五の末尾に見られるように、開元
十三年（七二五）の時點で既に四十三萬頭に達していたのに、そ
の後もひきつづき突厥から馬を大量に購入した理由は、契丹や
吐蕃との戦鬪によって馬が消耗したことにもあるが、また胡
種をまじえることによって壯馬をつくりだしたり（史料三二）、
巡幸のさいに色によってわけた馬群を従えるというように玄宗
が派手好みであったことにもあらう（史料三三）。

（史料三三）その後、突厥、款塞（降附）するや、玄宗厚く
これを撫し、歲に朔方軍西受降城にて互市を爲すことを許
す。金帛をもって市馬し、河東・朔方・隴右に於いてこれを
牧す。既にして胡種を雜え、馬すなわち益壯なり（『新唐書』

卷五〇「兵志」）。

（史料三三）上の東封するや、牧馬數萬匹をもつて従え、色
もて別けて群を爲し、これを望まば雲錦の如し（『資治通鑑』
卷二二二、開元十三年十一月の條）。

従つて、馬價も比較的高かつたのではないであらうか。

(20) 嗽欲谷が毗伽可汗をいさめた言葉の中に、ベルンシュタム
は、次のように興味深い背景を見出している。すなわち嗽欲谷
は舊來の民族的貴族層の代表であり、佛教をイデオロギー的道
具として率ずる新興ベグ階層（彼らはもはや「封建的」地主階
層でもあった）の擡頭をおさえこんだと解釋するのである（*Or
Phurem*, 1946, cc. 183—184）。彼の説くところは、個々の細
部には問題とすべき點も多いが、新舊兩勢力の對立があつたと
する大枠は、みとめてもよいであらう。

(21) 近年、遊牧民の歴史を定着化の進行度から時代區分しよう
とする研究者に、ソ聯のブレトニョヴァがいる。彼女の研究に
よれば、突厥は支配下の中央アジアのオアシス地帯から農産物
を獲得することができたために、自前の農耕を必要としなかつ
たという（*Urengai*, 1982, cc. 69, 87）。ユーラシア草原の遊
牧民の歴史を體系化・一般化しようとする努力に敬意を拂うこ
とに私も吝かではない。むしろ彼女の精力的な一連の著作活動
は、何らかの形で紹介・批評したいと考えているほどである
が、彼女の突厥のとらえ方は的はずれと言わざるをえない。

（附記）

ハンガリーの東洋史家エチエディは、「六世紀後半における
突厥・中國間の交易・戰爭關係」と題する論文の中で、遊牧民

の入寇掠奪の目的が、從來言われているように農産物の獲得にあったのではなことを指摘し (Eccsey, 1968, p. 140) 、『その点では本稿註 (1) の冒頭に挙げた研究よりは高く評價できる。しかしそれにつづいて彼女は、遊牧民の入寇を、交易を避ける中國側を威嚇する手段としてのみ解釋し、従って遊牧民側の軍事力が強ければ強いほど交易量は増大したと考えている (ibid., pp. 141—142) (劉茂才とジャグチドも、同じ觀點から遊牧民と中國との交易關係を見ているが、エチエディが最も詳細に首尾一貫して説いてゐるので、ここに紹介する (Liu, 1968, ss. 452—453; Jagchid, 1977, pp. 178, 191)。

彼女によれば、突厥が絹馬交易の量的擴大を要求すると中國側はそれを拒否する、そこで入寇して中國を困らせ、交易量の増大を認めさせる。さらにまた突厥が増大を要求すると中國側は拒絶し、また突厥が入寇する。このようにして、頻々たる遊牧民の入寇は起るのであると説明する (ibid., p. 141)。

彼女の理論には、遊牧民側が絹製品をのどから手が出るほど欲しかったのに對し、中國側にはその代價として遊牧民から手に入れたくなるような物がほとんど何も無かったとする見方が、前提として存在している (ibid., pp. 141, 144)。そして、遊牧民側が餘剩家畜のはけ口としても絹馬交易を利用しようとしたのに對し、中國側は家畜が十分にあり、馬もほんの少ししか (Only in limited number) 必要としなかった、つまり中國側にとって交易は經濟的意味をほとんど持たず、單に政治的配慮によってのみ行なわれた、としてゐる (ibid., pp. 144—147)。

遊牧國家の入寇の主要な目的が人民掠奪にあったことは本稿で屢々述べてきたので、それについてはここでくどくどしく述べることはしない。ただ、絹馬交易は一方的に遊牧國家の經濟のみを利するものであったとする説には、反論を加えておきたい。

たしかに、中國側が遊牧國家に對して交易をみとめる背景には、政治的配慮がはたらいていたことであろう。しかしそれだけではあろうか。はたして中國は馬を必要としなかったのであろうか。交易を望んでいたのは遊牧國家側だけだったのであろうか。實際には中國側もそれを望んでいたことが多いのであり、そのことは、以下の玄宗の言葉の中にうかがうことができる。

〔史料三四〕(開元)九年(七二二)、二月、丙戌、突厥、使いを遣して來朝し、方物を獻じて、且つ和好を通ず。帝、璽書を降して曰く、「國家、舊、突厥と和好の時、蕃漢非常に快活にして、甲兵は休息し、互市は交通す。國家は突厥の馬羊を買い、突厥は國家の綵帛を將らし、彼れ此れ豊かに足り、皆、便宜有り。……」〔冊府元龜〕卷九八〇。

中國がとりわけ望んだのは、家畜の中でも馬、それも軍馬であった。本稿の史料二六と同じ出來事を傳える『資治通鑑』では、突厥との交易によって軍馬を増やし、また官營牧場の種馬ともされ、その結果、唐の國馬はますますさかなくなったという〔『資治通鑑』卷二二、開元十五年九月の條〕。

中國が欲しいのは軍馬であるから、平和な期間が長くつづけば馬は消耗せず、當然馬價は安くなる。史料四に引いたように、隋末唐初は國馬が極端に少なくなったが、その後牧馬の管

理よろしきを得て、麟德年間（六六四—六六五）には七十萬頭に達し、その時には絹と馬との交換比率が一対一になった（史料三五）。垂拱（六八五—六八八）以後馬が大幅に減ったのは、則天武后の治世に叛亂があいつぎ、また契丹や突厥・吐蕃の入寇がつづいたためであらう。

〔史料三五〕〔張〕萬歲、その職を善くし、貞觀より麟德に至り、馬、蓄り息え、七十萬に及ぶ……。是の時、天下、一縑をもつて一馬を易う。垂拱以後、馬、大半を落れ耗らす。上（玄宗）、はじめて即位するや、牧馬二十四萬匹を有す。太僕卿王毛仲をもつて内外廐使となし、少卿張景順をもつてこれを副えしむ。ここに至りて馬四十三萬匹を有し、牛羊はこれに稱う（『資治通鑑』卷二二二、開元十三年十一月の條）。

このように、内憂外患がうちつづいたり、大規模な對外遠征を行なうために馬が不足した時には、密貿易も頻繁に行なわれた。

たとえば、大業三年（六〇七）に隋の煬帝が漠南の榆林に幸した時、隨從していた宇文文化及・智及の兄弟が國禁に違反して突厥と交市を行ない罰せられた（『隋書』卷八五「宇文文化及傳」）。この事件はエチエディも引用しており、中國官僚が經濟を二の次と考え、交易という行爲を輕蔑していたことの例として挙げている（*op. cit.*, pp. 145—146）。しかし、朝貢貿易の場合には中國側が不要品でも引取ることがあるかもしれないが、密貿易ではそのようなことはありえない。雙方とも經濟的な利潤が生ずるからこそ密貿易が成立しうるのである。實際に、この行幸の三年後、高句麗遠征用の軍馬が足りず、民間か

ら購入しているのである（『隋書』卷二四「食貨志」）。宇文文化及らは突厥から馬を購入し、それを京師へもちかえて高く賣るつもりだったのであらう。

また突厥ではないが、のちのウイグル時代にも盛んに密貿易が行なわれていた。貞元四年（七八八）にウイグルに使いた趙憬は、他の者がみな絹馬の密貿易を行なっているのに對し、一人、奇特にもそれを行なわなかったということで稱讃されているほどである（『舊唐書』卷二三八「趙憬傳」）。これも、安史の亂以後のうちつづく内憂外患のために軍馬が絶對的に不足していたことから生じたのであらう（ウイグルが唐に大量に馬をもたらし背景に、唐朝廷が恒常的に馬に不足していたという事情があったことについては、ジャグチドがくわしく考證している）（札奇斯欽、一九七二、三九—三九二頁）。

エチエディの論文の題目中には「六世紀後半の突厥と中國」とあるが、彼女は本文中でもしばしば彼女の理論が他の游牧民と中國諸王朝との關係にもあてはまることを強調している。匈奴から近世のモンゴル高原の游牧民に至るまでの草原の歴史を、中國との交易・戰爭という觀點から構造的に解明しようとする彼女の姿勢には共感をおぼえるが、その結論には賛同しかねる。

文 獻

青木富太郎、一九七二、『萬里の長城』（世界史研究雙書13）、近藤出版社、二六九頁。

岩佐精一郎、一九三六、「突厥の復興に就いて」（『岩佐精一郎遺稿』、

東京) 七七—一六七頁。

石見清裕、一九八二、「唐の建國と匈奴の費也頭」(『史學雜誌』第九一編第一〇號) 七四—九七頁。

石見清裕、一九八三、「突厥の楊正道擁立と第一帝國の解體」(『早稻田大學大学院文學研究紀要』別冊第一〇集)、一三五—一四四頁。

小野川秀美、一九四三、「中世(突厥回鶻時代)」(『支那周邊史』白楊社) 三三五—四二七頁。

札奇斯欽、一九七二、『北亞游牧民族與中原農業民族間的和平戰爭與貿易之關係』、臺北、正中書局、五八四頁。

岑仲勉、一九五八、『突厥集史』、北京、中華書局、一一三六頁。

羽田明、一九七一、「ソグド人の東方活動」(『岩波講座 世界歴史』第六卷) 四〇九—四三四頁。

林俊雄、一九八三—a、「匈奴における農耕と定着集落」(護雅夫編『內陸アジア・西アジアの社會と文化』山川出版社) 三—三二頁。

林俊雄、一九八三—b、「鮮卑・柔然における農耕と城塞」(『古代オリエンツ博物館紀要』第五卷) 三七七—三九四頁。

馬長壽、一九五七、『突厥人和突厥汗國』、上海人民出版社、一〇六頁。

松田壽男、一九六七、『游牧生活とオアシス農耕』(『歴史教育』第一五卷第九・一〇號) 一一—四頁。

水谷眞成(譯)、一九七一、『大唐西域記』(中國古典文學大系22)、平凡社、四六三頁。

護雅夫、一九五〇、「中國古代における游牧國家と農耕國家」(『歷史學研究』第一四七號) 一一—二三頁。

護雅夫、一九六七—a、「東突厥國家内部におけるソグド人」(『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社) 六一—九三頁(初出『古代學』第一二卷第一號、一九六五)。

護雅夫、一九六七—b、「突厥と隋・唐兩王朝」(『古代トルコ民族史研究Ⅰ』山川出版社) 一六一—二三三頁。

護雅夫、一九七六、「突厥碑文割記——突厥第二汗國における『ナシヨナリズム』——」(『東洋史研究』第三四卷第四號) 一一—一三頁。

山田信夫、一九七二、「突厥傳」譯注(『騎馬民族史2 正史北狄傳』平凡社東洋文庫二二三) 二七一—一八八頁。

吉田順一、一九八〇、「ハンガイと陰山」(『史觀』第一〇二冊) 四八—六一頁。

ECSEDY, Hilda, 1982, "Trade-and-War Relations between the Turks and China in the Second Half of the 6th Century", *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae*, Tomus XXI, fasc. 2, pp. 131—180.

JAGCHID, Sechin, 1977, "Patterns of Trade and Conflict between China and the Nomads of Mongolia", *Zentralasiatische Studien*, 11, pp. 177—204.

KWANTEN, Luc, 1979, *Imperial Nomads: A History of Central Asia, 500—1500*, University of Pennsylvania Press, 352 p.

LIU Mau-tsai, 1958, *Die chinesischen Nachrichten zur Geschichte der Ost-Türken (T-t'ieh)*, Wiesbaden, 831 s.

БЕРНШТАМ А. Н., 1946, *Социально-экономический строй*

орхон-енисейских тюрок VI-VIII веков : восточно-тюркский
каганат и кыргызы. М.-Л., 207 с.

ПЛЕТНЕВА С. А., 1982. Кочевники средневековья : поиски ис-
торических закономерностей. М., 188 с.

**THE DEVELOPMENT OF A NOMADIC KINGDOM SEEN
FROM THE PERSPECTIVES OF PILLAGE,
AGRICULTURE AND TRADE — in the
case of Tuque 突厥**

HAYASHI Toshio

Ever since the Xiongnu 匈奴 the nomadic kingdoms arising on the Mongolian plateau had made raids into China and the objects of pillage had always been humans and livestock. Chinese were taken captive and made to settle in groups in the northern part of the Mongolian plateau as farmers and handicraftsmen. The Tuque also took Chinese captive in order to settle them as farmers, but in contrast to other nomadic kingdoms this was done in the southern part of the Mongolian plateau, in the area between the Yinshan 陰山 mountain range and the Yellow River. This area was more suitable for agriculture, but had the drawback of being too close to China proper. At the time of Mochuo 默啜, the second khan of the second Tuque khanate, the area was taken back by the Tang dynasty. Abandoning the possession of this area and an economy based on pillage, Mochuo's successor Pique 毗伽 changed policies, putting the emphasis on trade instead. In this can be seen the origins of the policy of emphasizing trade adopted by the ruling stratum of the following Uighur khanate, but the development of cities as centers for agriculture and handicraft industry and as locations for trade had to wait until the advent of the Uighur khanate.